

シンポジウムの概要

かゆみと痛み研究の最前線： 基礎研究から臨床応用まで

オーガナイザー

藤井正徳（京都薬大）
藤田和歌子（長崎大院医歯薬）

かゆみと痛みは、本来、生体の異常を知らせる警告系として必要な感覚であるが、様々な疾患に伴ってそれらがひどく長く続く場合は適切に治療すべきである。しかし、慢性疾患におけるかゆみや痛みの発症メカニズムについては不明点が多く、治療が困難である場合が少なくない。

また、既存の薬物治療においても、薬物の耐性や他の薬剤の副作用として、かゆみ、痛みや感覚異常が生じて

しまうなどの様々な問題が存在する。

本シンポジウムでは、上記背景を踏まえ、かゆみと痛みに関する最新の研究成果を紹介する内容を企画した。具体的には、▽オピオイド受容体と鎮痛耐性▽しびれの発症機構解析と治療薬開発戦略▽アトピー性皮膚炎における中枢性かゆみ増悪機構▽アトピー性皮膚炎のかゆみの新規治療薬開発——について紹介する。

また、基礎および臨床研究の両方の観点から、今後のかゆみと痛みに対する創薬と治療法の開発について議論する。

（藤井正徳）

大学院生・学部生シンポジウム

Nothing seek, nothing find.

—分子イメージングの先に見えるもの

オーガナイザー

中島孝平（北大院薬）
貝出翔（京大院薬）

分子イメージングは、生体内の蛋白質などの分子の変化や動きを可視化する手法である。例えば、核医学イメージング法は、基礎研究から臨床研究まで幅広く利用可能な分子イメージング法として発展を遂げてきた。また、この20年の間に蛍光や光音響波などを用いる新たな技術開発も行われており、最近では分子イメージングによる診断と治療を組み合わせたセラノスティクスという概念も発展しつつある。

本シンポジウムでは、分子イメージング剤の開発研究やその応用に焦点を当て、最前線に立つ大学院生や学部生が日々取り組んでいる研究に関して紹介する。

諸疾患の診断・治療法の開発や生命現象の解明に向けて、蛍光・光音響・核医学分子イメージング剤やセラノスティクス研究の現状を発信すると共に、成熟しつつある本分野の数十年後の動向についても思索する。

本機会が、分子イメージング研究の多彩な未来への出発点となることを期待する次第である。

（中島孝平）

大学院生・学部生シンポジウム

若手薬学研究者で加速させる 感染症トランスレーショナルリサーチ

オーガナイザー

田代渉（慶應大薬）
尾上知佳（富山大院薬）

耐性菌による感染症の年間死者数は、対策を講じなければ現在の70万人から2050年には1000万人に増加すると報告されており、耐性菌感染症は世界における大きな脅威となっている。

本シンポジウムでは、基礎から臨床研究まで様々な背景で感染症研究に取り組む若手薬学研究者6人による発表を企画した。

上記の大きな脅威を克服したい、医

療現場の抗菌化学療法に貢献したいという強い信念を持つ若手研究者が見つけた新しい医療の種（シーズ）を持ち寄り意見交換を行う。そこで、基礎と臨床の双方向からシーズを育成することにより、新しい医療を早く社会へ届けられると期待している。

本シンポジウムを契機に、基礎と臨床分野の若手研究者がより有機的に連携することで、次世代の革新的な抗菌化学療法の開発に結び付き、人類の脅威であり世界的に問題となっている耐性菌感染症の克服に近づくと考えている。（田代渉）

元素の力で切り拓く次世代の低分子創薬

—重水素から高周期元素まで

オーガナイザー

藤井晋也（医科歯科大生材研）
太田正規（昭和薬大）

近年、生命科学における技術革新を受けて、抗体医薬や核酸医薬、あるいは細胞医薬や遺伝子治療など、新しいモダリティの創薬研究が活性化している。その一方で、医薬品の王道として君臨していた低分子化合物の創薬研究は、それらの新たなモダリティに押されてプレゼンスが低下している印象は否めない。

しかし、低分子医薬品はコストや品質管理において大きな強みを有してお

り、今後も世界の疾病克服のための第一選択であると考えられる。

本シンポジウムでは、低分子創薬を活性化する一手法として、元素多様化による新たな創薬戦略に焦点を当てる。重水素、ホウ素、ケイ素、そして高周期元素のヒ素まで、多様な元素の性質に着目した多元素創薬化学研究、そして2020年に承認された初のホウ素中性子捕捉療法薬ボロファラン(¹⁰B)の開発についての講演を通して、画期的な創薬研究手法の開発や、革新的新薬を生み出す新しい低分子モダリティの創出について議論したい。

（藤井晋也）

環境・衛生部会若手研究者シンポジウム

金属研究の新たな切り口：分子から ヒトを対象とした研究最前線

オーガナイザー

岩井美幸（国立環境研究所）
藤代瞳（徳島文理大薬）

近年、金属類などの化学物質曝露による子供の健康影響に関する報告が増加し、世界各地で大規模出生コホート調査が進められている。

日本でも環境省が主体となって、子供の健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）が実施されている。およそ10万組の母子の協力のもと、妊娠中から出生後13歳になるまで追跡する出生コホート調査である。

近年、10万人の母体血中金属類濃度（水銀、鉛、カドミウム、マンガン、セレン）の分析が完了し、様々なアウ

トカムとの関連について解析が進められている。

本シンポジウムでは、金属類に関するエコチル調査から得られた最新の成果について紹介すると共に、乳歯を用いた新たな研究への取り組みを紹介する。また、本シンポジウムでは、金属類に関する新しい分析技術、および金属類の生物学的な機能や構造に着目した研究について紹介する。

本シンポジウムを通して、新しい分析技術の利用・応用、生物学的な機能や化学形態に基づいた研究から見えてくる新たな研究展開の可能性について、理解を深めるために企画した次第である。

（岩井美幸）

祝 日本薬学会 第141年会 (順不同)

 <p>一般財団法人 日本医薬情報センター</p> <p>〒150-0002 渋谷区渋谷二丁目15番1号 電話 〇三(五五五)一八一 URL: https://www.japic.or.jp</p>	 <p>公益財団法人 日本薬剤師研修センター</p> <p>〒107-0052 港区赤坂一丁目9番5号 電話 〇三(三五五)八二〇</p>	 <p>公益社団法人 薬剤師認定制度認証機構</p> <p>〒105-0003 東京都港区西新橋一丁目九番八階 代表理事 吉田武美 電話 〇三(三五五)九一八</p>	 <p>公益社団法人 日本薬剤師会</p> <p>〒160-8389 東京都新宿区四谷三丁目一七番 会長 山本信夫 電話 〇三(三三五)一一七〇</p>
---	---	---	---

UNE HISTOIRE DE LA PHARMACIE
REMÈDES ONGUENTS POISONS

薬学の歴史

くすり・軟膏・毒物

監修：イヴァン・プロアール パリ・デカルト大学 マルティニエール社
翻訳：日仏薬学会/日本薬史学会

美しき絵画とともに壮大な薬学史をまとめた書の日本語翻訳版
B5判/上製/232頁/カラー/定価5,000円+税

薬事日報社 ご注文は、オンラインショップ(<http://yakuji-shop.jp/>)
または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。